

Title	ラブレーとラファルグ：19世紀におけるラブレー受容の1例
Sub Title	Rabelais et Lafargue : un exemple de la réception de Rabelais au XIXe siècle
Author	荻野, 安奈(Ogino, Anna)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.107, (2014. 12) ,p.121 (172)- 138 (155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01070001-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラブレーとラファルグ

— 19世紀におけるラブレー受容の1例 —

荻野 安奈

ポール・ラファルグは19世紀の社会主義者で、マルクスの娘婿だった。専門分野で大部の著作もあるが、今日の読者には幾つかの風刺小品、ことに『怠ける権利』の作者として知られている。文学者の呼称はラファルグに似つかわしくないものの、『怠ける権利』の魅力は主にその文学性にある。ただし近代文学における小説の概念からはかけ離れており、作風と直接的な引用の両面で16世紀の作家、フランソワ・ラブレーの少なからぬ影響が見受けられる。ラファルグの中のラブレーを追っていくことで、文学とは何か、という大きすぎる問いを、ささやかな規模で投げかけてみたい。

1. ラファルグ 人と作品

1-1. ポール・ラファルグ (1842-1911)

ラファルグはキューバのサンティアゴ・デ・クーバの、コーヒー農園の一人息子として生を享けた。フランス人だが父方の祖母はムラートで、母方からはカリブとユダヤの血を受け継いでいる。後に「インターナショナル」で活躍することになる彼は、生まれからしてインターナショナルであった¹。

9歳の折、一家はフランスに移住し、父方の祖父伝来の地ボルドーに落ち着く。彼はパリ大学医学部に進むが、プルードンの影響を受け社会主義者となり、大学から放逐される。その後ロンドンに渡り、マルクスと出会い、1868年には次女のラウラと結婚する。

1871年、パリ・コミューンに参加し、地方蜂起の支援に回る。敗退後はスペインを経てロンドンに亡命する。その間フランスでは70年代後半より労働運動が再興し、1877年にジュール・ゲードらが週刊誌「平等(L'égalité)」を創刊する。すでにゲードと手紙により親交を深めていたラファルグが1880年に同誌に寄稿したのが『怠ける権利』である。

1882年、パリに戻ったラファルグはゲードと共にフランス労働党を指導する立場となる。1883年、ストライキの煽動で投獄された刑務所内で『怠ける権利』の序文が執筆され、同年、単行本として出版された。

その後もラファルグは、監獄中で下院議員に選出されるなど、波瀾万丈だった。政界引退後は、70歳を目前に、妻ラウラと青酸カリで自殺した。生きる喜びが消滅する前に自らの生涯にピリオドを打つ、という意志の表明であった。

1-2. 『怠ける権利』の背景

ラファルグの著作の中で、『怠ける権利』は唯一今日も多数の読者を獲得している。パラドックスに分類される作品だが、具体的に何らかの著作を諷刺しているわけではなく、フランスの二月革命(1848年)で要求された「労働の権利」がパロディの対象となっている。1842年生まれのラファルグは、二月革命当時はまだ子供であり、彼が社会主義者として体験したのはむしろパリ・コミューンである。にもかかわらず二月革命の労働権を主題に選んだところに彼の慧眼がある。

二月革命は凶作と経済恐慌を背景に、普通選挙を求める民衆運動が発端となった。国王ルイ・フィリップは追放されたが、成立した臨時政府の高官たちはラマルチヌを中心としてほとんどが日和見共和主義者だった。しかし2名の社会主義者が入閣したことは特筆に値する。社会主義者ルイ・ブランと労働者アルベールである。

ルイ・ブランが1840年に出版した『労働の組織化』をモデルとして、2つの計画が実行に移される。通称リュクサンブール委員会と国立作業場である。委員会は政府の介入による労使の紛争解決に若干の功があったもの

の、労働時間の短縮を始めとする改革案は実現に至らなかった。国立作業場には地方の失業者が殺到し、国家財政を圧迫。ようやく実現した普通選挙で有権者数が激増したにも係らず、皮肉なことに社会主義は大きく後退する。

ラファルグが着目した労働の権利は、具体的には労働時間を1時間短縮する「時短デクレ（政令）」である。パリでは10時間、地方では11時間を最長労働時間とするものである。当時の労働条件がいかに劣悪であったかを彷彿とさせるデクレだが、9月には廃止され、紆余曲折の上、11月に制定されたフランス第二共和制憲法には反映されずに終わった²。

実際には日の目を見なかった労働の権利だが、その重要性はラファルグの義父マルクスが既に指摘している。マルクスは労働の権利が、最終的には労働者階級による生産手段の占有に至る、とする³。この視点を、パロドクスの的に逆転させてみせたのがラファルグだった⁴。

1-3. 『怠ける権利』とは

ラファルグが目指すのは、究極の時短である。1日3時間労働にして、残りの時間は「ぶらぶらしてご馳走を食べる」(p.34)⁵というのだ。3時間の根拠は不明だが、トマス・モアは彼のユートピアでの労働時間を6時間としていた⁶。6時間をマルクス式に必要な労働と剰余労働に分けて3+3=6とし、3時間を導き出したのかもしれない。

『怠ける権利』は薄い小冊子であり、主張そのものは単純だが、4章仕立ての本文に序と付録がついて、読者を飽きさせない。

「序」では宗教と結託したブルジョワジーの反動的な労働観を非難し、作品を『『労働の権利』への反論』(p.18)と位置付けている。

第一章「厄災をまねく教義」では、労働者階級の労働への情熱を「奇妙な狂気」(p.19)と捉え、知的・肉体的に悪影響を与えている、とする。対する怠惰の知的担保として、ラファルグは聖書の援用を厭わない。

〈髭面・強面の神エホヴァは、崇拜者たちに、理想的な怠惰の最高のお手本を示した。6日間働いたあと、彼は永遠に休んだわけだ。〉(p.22)

第2章「労働の恩恵」においては、労働者を抑圧するブルジョワ思想が弾劾され、アルザス地方での悲惨な長時間労働の例を経て、1日3時間労働の勧めがいよいよ現れる。植民地主義の背景に商品の過剰生産があるという指摘は次の章に持ち越される。

第3章「過剰生産に続くもの」によれば、労働者の過剰労働が、資本家階級の「過剰消費」(p.39)をもたらしている。初期資本主義の禁欲的生活態度をかなぐり捨てたブルジョワジーは、暴飲暴食と放蕩で自らの身を危険に晒している。

機械の発達が人間の労働を軽減するはずが、余剰人員が資本家側の使用人に廻されるため過剰労働の実態に変化はない。結果として起こる内乱は弾劾され、軍隊は国外ではなく「内部の敵」(p.42)から資本家を守る。

この場合、新たな消費者の開拓には2つの可能性がある。海外進出と、耐久性のない粗悪品の生産である。このようなまやかしに対し、著者は労働時間の短縮を提唱する。

第4章「新たな旋律には新たな歌を」では、時短の実現した社会におけるブルジョワジーとプロレタリアート、両方の解放が謳われる。前者は「なんでも消費者」(p.50)であることを止め、労働者が消費する側にまわる。

「付録」にはギリシャ、ローマの賢人たちによる労働批判がまとめられている。

2. 逆説としての『怠ける権利』

2-1. 逆説的賛美

『怠ける権利』がパラドックス(逆説)であることは、内容を一瞥すれば理解できる。さらに細かく見ると、怠惰という通常非難の対象となるものを礼賛する姿勢に、ひとつの修辞学的伝統が隠れている。

アリストテレス以来、弁論術は政治弁論、法廷弁論、演説的弁論に大別される。演説的弁論は賞賛・非難する弁論である。例えば時の為政者やオリンピックの勝者を褒める。賞賛のためには、類語の中から最も好ましいものを選んで用いる。アリストテレスに倣えば、「無謀な人は勇気のある

人』⁷となる。用いられる技法は誇張である。

正統的な賛美と並行して、逆説的賛美もまた存在した。最初はよりよく褒めるための練習として、褒めがたい人・物を取って褒めて見せた。暴君、動植物、病氣、禿、無など主題の幅は広い。古代で有名な作品はルキアノスの「蠅」賛美である。ルネサンス期に至るとエラスムスが『痴愚神礼賛』でこのジャンルを哲学にまで高めた。エラスムスを師と仰ぐフランソワ・ラブレー（1483？ - 1553）の作品中にも幾つかの例が見られる。近代に入るとさしたる名作を生まず、20世紀には実質上消滅した⁸。

ラファルグの取り上げた怠惰もまた、逆説的賛美の理想的な主題である。滑稽な主題を掲げつつ資本主義の歪みを風刺する姿勢が、彼に始まるものではないことを、先ほどのラブレーを例に挙げて確認しておきたい。

フランソワ・ラブレーの『第三の書 パンタグリユエル』（1546年）は、第3章と第4章が借金賛美に充てられている。実質上の主人公であるパニユルジュは、借金で首が回らない。主君の巨人パンタグリユエルに諭されると、反省するどころか、むしろ借金潰けの状態を二章にわたって礼賛して見せる。

〈いかに私がいい御身分か、ご想像もつかないでしょうね。毎朝、周りには借金取りがわんさか居て、みなさん腰が低くて、気働きがして、平身低頭なんです。私が中の一人に他の連中よりもいい顔を見せたり、ちっとはマシな対応をしてくれませんか。そいつはイの一番に払ってもらえる、自分が一番先だと思って、私の笑顔を現金扱いするという現金な有様、たまりませんや。〉（p.362）⁹

ラブレーの時代は台頭しつつある資本主義がその弊害をも含めて認識され始めており、高利貸へのこの手の皮肉も彼の独創によるものではない。ラブレーから3世紀を経たフランスを、ラファルグは似たような筆致で描く。「借金また借金で」過剰生産を続ける工場主たちは、「累積する商品に販路を求め、東奔西走する」（p.32-33）。

〈そしてこのフランス資本の輸出は、いずれ外交上の紛争をもたらすに至る。エジプトでは、フランスとイギリスとドイツが掴み合い寸前で、

どの債権主が最初に返済してもらえるのか知りたがっている。〉(p.33)

背景として、普仏戦争で手いっぱいフランスを横目に、イギリスはスエズ運河の株を大量に買い占めていたのである。個人のレベルと国家のレベルの差はあるが、われがちに支払を求める高利貸、という構図はラブレールとラファルグに共通する。とはいえ影響関係というよりも、同じ社会基盤の上に立ち、同じジャンルを試みたことの証左と見なしたい。

2-2. 桃源郷

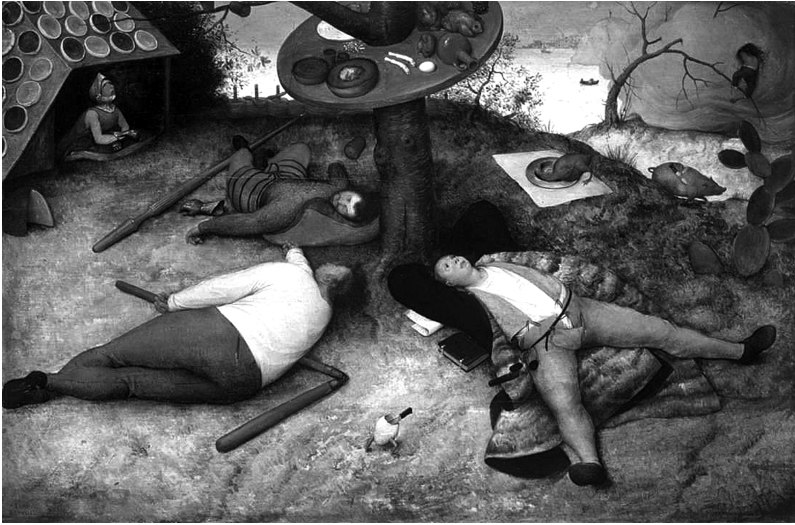
ラファルグの『怠ける権利』が立脚する文学的伝統はもうひとつある。そのことを理解するためには、まず労働と怠惰を簡単に分類することから始めたい。

労働に、良い労働と悪い労働があるように、怠惰にも二種類がある。良い労働は、ラファルグに倣えば「怠ける喜びの味付け」(p.34) たりうる3時間労働である。悪い労働は、労働者を疎外する長時間労働だろう。

対する怠惰であるが、ラファルグはブルジョワジーの飽食を憎むべきものとした上で、プロレタリアートの大宴会を理想の未来に設定している。同じ現実が、享受する立場の違いで批判されたり賞賛されたりしているように見えなくもない。

ラファルグは恐らくジャンルの要請に従い、風刺に徹するために、怠惰のより生産的な側面にあえて触れなかったのかもしれない。古代、閑暇(*otium*)は引退後の些事から離れた生活を指し、芸術、哲学に用いられる有意義な時間を表わした¹⁰。

閑暇が古代の知識人たちが憧れる怠惰とすれば、「コカーニュの国」は民衆的な想像力の産んだ怠け者の天国である。同名のブリューゲルの絵画が有名だが、文学作品においては13世紀のファブリオに遡る¹¹。ラブレールと同時代の匿名作品、『パニユルジュ航海記』に描かれる架空の国では「あたたかい挽肉団子が生えて」おり、「すっかり焼鳥になった雲雀が雲から落ちてくる」¹²。バター mountain から牛乳の河が流れる島や、チーズの生える島も登場する。



ブリューゲル「コカーニュの国」

日常的に飢餓と闘っていた時代の罪のない夢は、キリスト教の道徳においては7つの大罪の2つを占める。怠惰と暴食である。ラファルグは同じ現実の肯定的な要素と否定的な要素を、プロレタリアートとブルジョワジーに振り分けていたのかもしれない。

いずれにせよ、『怠ける権利』が桃源郷の文脈に置かれるべき作品であることは、その語彙からも明白だ。ラファルグは皮肉でベルギーを「資本主義の『コカーニュの国』」(p.43)と呼んでいる。別の個所では労働の狂気に囚われ、「働こう、働こう、国富をふやすために」と繰り返す労働者たちが「アルカディアのオウム」(p.48)と評されている。アルカディアはギリシアにおける理想郷である。他にも「労働者の黄金時代」(p.27)など黄金時代の神話に連なる単語も出てくる。バター山の山とミルクの河のヴァリエーションとしては、「畑には象牙が植えられ、ヤシ油の川には砂金が流れ」(p.44)る、搾取の対象としてのアフリカがある。

このように『怠ける権利』においては、偽桃源郷としての資本主義と、本来の桃源郷が真っ向から対立する、という構図が読み取れるのである。

2-3. コピペの権利

以上の流れからすると、『怠ける権利』は極めて独創的な作品と思われるかもしれない。実際には著作権という概念を全否定しかねないコピペの天国なのである。

『怠ける権利』について初めて纏まった注釈を施したモーリス・ドマンジェは、題名自体、先行作品の模倣ではないかと指摘している。マルクスの書棚にはモロー・クリストフの『閑暇の権利について』があり、マルクスの書き込みのある一冊はラファルグ経由で、最終的にドマンジェの手に落ちた¹³。

ルイ・マチュラン・モロー・クリストフ（1799-1883）は法律家から転身し、監獄総監を長く務めた人物である。二月革命で職を引いた翌年の1849年に『ギリシア・ローマ共和国における下賤な仕事の編成および閑暇の権利について』¹⁴を出版した。ラファルグが自作に用いたのは第1章の、それも4ページから13ページまでで、著者が引用したヘロドトス、プラトン、キケロなどを堂々と孫引きしている。さらにこれらの引用はすべて「付録」の部分に用いられている。

一つの仮説を立てる。ラファルグはモロー・クリストフのタイトルにインスピレーションを得て、自作を書いた。後から『閑暇の権利について』をひもとき、自作に関係の無い「下賤な仕事」の部分はさておき、第1章の古代人の労働批判のみを自作の権威付けのために「付録」に頂戴した。引用記号無しに、モロー・クリストフの文をそのまま自分の文章に練り込んだ箇所さえ存在する。

ラファルグのもう一つの源泉はマルクスの『資本論』である。マルクスの名を明記した引用は一か所、他はマルクスが自作のために引用した著者たちの孫引きである。マルクスがギリシア詩人アンチパトロスをアンチパロスと間違えたのを、間違ったまま引いているという有り様である（p.36）。出典をマルクスと明記した唯一の引用では、自身の文章の途中から、前触れもなくマルクスのそれに代わり、最後の数行だけが申し訳のように引用符でくくられている（p.40-41）。

以上の2つの源泉以外にも、ラファルグ本人による多彩な引用が『怠惰の権利』のなかでひしめき合っている。それでも作品として成立しているのは、独自の発想と文体の高揚に負うところが大きい。発想と文体の背後には、第3の源泉であるラブレーが隠れている。

3. ラファルグにおけるラブレー

3-1. 固有名詞の魔力

ラブレーの名前は、序文の中で、作品を特定の位置に固定することに成功している。冒頭からラファルグは、享楽主義対禁欲主義の二項対立を設定する。前者を無神論、後者をキリスト教と関係づけることで、対立は階級闘争の色を帯びる。「聖職者の支持を集めた貴族」(p.17)に、無信仰のブルジョワジーが勝利するのだが、途端にブルジョワジーは手のひらを返し、キリスト教道徳を抛りどころとし始める。より正確には、自らに許す享楽を、労働者には禁じようとする。そのため「自派の思想家たち、ラブレー流やデイドロ流、の教えを否認し」(p.17)た。

思想上、18世紀のデイドロと16世紀のラブレーを同列に置き、両者をブルジョワジー代表と見做すには無理がある。殊にラブレーの生きた16世紀は、厳密な意味での無信仰を未だ知らなかった¹⁵。しかし文学者としてのデイドロに、ラブレーは多大な影響を与えており、両者の奔放自在な散文は、近代小説の枠に収まりきらないダイナミズムを体現している。

デイドロも含めた、いわゆるラブレー的なものを、ラファルグは社会的抑圧からの解放と同義に扱っているらしい。ラブレーの主人公である巨人たちは、たらふく飲み、食らい、人生を謳歌していた。彼らの敵は偏狭なソルボンヌ神学部であり、狂信的なカルヴァン派だった。寛容の精神に裏打ちされた享楽主義が、かくして「革命的社会主義者」(p.18)の目指すところとなる。

デイドロは序文に登場するなり退場で、山のような固有名詞の渦に巻き込まれて終わるが、ラブレーは第3章で、再びその名を顕わにする。プロレタリアートがブルジョワジーの禁欲主義を受け入れる以前の牧歌的な過



ヨルダーンズ「豆の王様」

去を描くにあたり、作者は3名の作家名を引用する。

〈ラブレー、ケヴェド、セルバンテス、そして悪漢小説の無名作者たちは、戦いや略奪の合間に当時の人々が堪能したとてつもない大宴会の描写で読者に涎を流させる。そんな宴会では全てが『大盤ぶるまい』だった。ヨルダーンズやフランドル派は彼らの闊達な絵にその情景をとどめた。気高いガルガンチュア的な胃袋の持ち主よ、おまえさんたちはどうなっちゃったんだ？ 人類の思想を包括的に取り込んでいた気高い脳みその持ち主よ、おまえさんたちはどうなっちゃったんだ？〉(p.38)

若き日にスペインを経験したラファルグらしい選択だが、ラブレーを除くスペインの作家たちが「大宴会」の描写にさほど身を入れた形跡はない。ラブレー以外は付け足しである可能性を高くしているのが、引用文中のラブレー絡みの表現だ。「大盤ぶるまい」は16世紀の成句で、ラブレーには

3回登場する¹⁶。「ガルガンチュア的」は「大食漢の」とも訳せるが、そもそもガルガンチュアはラブレーの主人公である。

ガルガンチュア的な宴会の画家として、17世紀のヨルダーンズを挙げるのは、ラファルグならではの個性的な選択である。自由すぎる観念連想と言い換えてもよい。上記の引用の直前には、プロテスタンティズム以前の「愉快なイギリス」も登場しており、作者の想像力が時代と地域を超えて、独自の反資本主義的ユートピアを目指しているのが分かる。

理想郷の現出のためのキーワードとしてラブレーの名前は機能しており、強調されるのはそのユマニズムではなく、フランスの一般的な読者が彼の名前から連想するポジティブな鯨飲馬食である。ラブレー的な大宴会とその場を支配する友愛の雰囲気テキストに定着させるためには、これまたラブレー的と評される過剰な文体が必要となる。ラブレーの文体とラファルグはいかに折り合いを付けたのだろうか。

3-2. 文体の魔力

『怠ける権利』におけるラファルグの文体について論じるのは難しい。汎テキスト性という単語が霞んで見えるほどの引用魔であり、本文のかなりの部分が引用の綴れ織りで出来上がっているため、そこから著者本人の文章を引き剥がす単純作業でさえ骨が折れる。

殊に第2章は、マルクスからの孫引きと某ヴィレルメ博士の論文が大部を占めているのだが、両者の間には、ラファルグの労働者たちへの生き生きとしたメッセージが挟まっている。労働者が1848年6月の武力蜂起で、労働条件を改善するはずが、むしろ逆の結果に終わり、「自分たちの妻子を産業界のやり手に引き渡した」ことを無念がり、著者は理想的な過去の細君たちを想起してみせる。

〈プロレタリアートよ恥を知れ！我々の昔話や笑い話に登場するおかみさんたち、ざっくばらんな、あけっぴろげの、酒びん天神が大好きな女たちはどこへ行ってしまったのか。陽気な女たちは今いずこ、いつでもバタバタして、いつでも料理して、いつでも歌って、いつでも生

命の種を播き、喜びを生み、苦も無く元気なチビちゃん達を産む女たち(は?) (p.25)

「酒びん天神」はラブレーの読者にはお馴染みの単語である。『第三の書』の末尾で、パンタグリユエルの一行は「酒びん天神」のお告げを求めて旅立つ。『第四の書』の航海譚を経て『第五の書』でお告げが下るのだが、その顛末をラファルグが心得ていたかどうかは不明である。今日でも「酒びん天神」は、ワインサロンの名前など、日常的に使われる表現なのである。

「酒びん天神」でラブレー的な場を確保したラファルグは、女性の生命力を讃美するに当たって、「いつでも」という副詞を4回繰り返している。フランス文学史上、「いつでも」の4回繰り返しを敢行したのは、ラファルグでなければラブレーだ。

〈(ソクラテスは) そんなにも外見が醜く、振る舞いが滑稽だった。鼻が上を向いており、目は雄牛みたいにとろんとし、瘋癲の顔をしていた。生活は質素で、服装は垢抜けず、金運が無く、女運も無く、共和国のいかなる公務にも不向きで、いつでも笑い、いつでも乾杯をし、いつでもからかい、いつでも崇高な知恵を隠していた。〉 (p.5)

以上は『第一の書 ガルガンチュア』の序文の一部である。ソクラテスの外見は見栄えがしないが、中身は「崇高な知恵」に満ちている。同様に自著が滑稽な外観の裏に叡智を秘めたものであると、ラブレーは主張する。ルネサンス期にはプラトン経由でソクラテスは知の英雄として崇められていた。その知はソルボンヌ神学部式に硬直したものではなく、哄笑と乾杯と揶揄に支えられた、生きた知恵として認識されていた。生命力の肯定、という点でラブレーの引用はラファルグのそれと重なる。そして、同語反復のもたらす強い印象が、2人の作家を繋ぎ、同質の高揚感をテキストに与えている。

その後、長時間労働の悲惨、ブルジョワジーの狡知、と筆は進む。過剰労働から派生する過剰生産で経済は破綻し、国際紛争を生む。第2章の終盤近くになって、ようやく「怠ける権利」の実態が明らかになる。

〈しかし、プロレタリアートが自らの力に気付くためには、彼らはキリ

スト教と経済と自由思想にまつわる道徳から生じる偏見を打破せねばならない。自らの本能に立ち返り、「怠惰の権利」を主張すべきだが、これはブルジョワ革命の詭弁論者どもの労作である脆弱な「人間の権利」よりは、遥かに高貴で神聖なものである。1日3時間しか働かず、残り時間は昼も夜もぶらぶらしてご馳走を食べるべきなのだ。〉
(p.34)

「いつでも」の連呼が現出せしめた健全な生活が、ここでは改めて「怠惰」の名のもとに推奨されている。なぜ1日3時間なのか説明はない。残りの21時間は無為徒食と受け取られかねないが、ラブレールという護符を要所所で差し出したことで怠惰が正当化されている。とはいえ、ブルジョワジーの太鼓腹に詰め込まれるトリュフやワインが、プロレタリアートの「ご馳走」に変化するとしたら、それは単なる支配者の入れ替わりに過ぎず、根本的な問題が解決されたとは言えないのではないか。テキストが大団円を迎えるためには、ブルジョワジーとプロレタリアートの再定義が必要であり、ラファルグは「第4章」でその手間をかけるのだが、やはりラブレールという助っ人を呼び出さずには済まなかった。

3-3. ラファラブレール

「第4章」の冒頭では、時短と機械力の導入により、プロレタリアートが消費力を付けると同時に、「なんでも消費者」のブルジョワジーが「過剰消費」の重荷を降ろす、という筋書きが提示される。以前はしかるべき地位にあったブルジョワたちが、無為に甘んじることができない場合、「不愉快な仕事」が彼らを待ち受けている。

〈—デュフォールは公衆便所の掃除をするだろうし、ガリフェは疥癬豚や膨れ馬をぶち殺す。(略) 上院議員は、葬式がお好きだから、葬儀人夫がよろしかろう。〉 (p.52)

この世の権力者があの世で惨めな地位に就くのは、「逆立ちした世界」のトポスに相当する¹⁷。古くはギリシアに遡るが、ラブレールの『第二の書パンタグリユエル』でも、ほぼ1章が地位の逆転に充てられている。主人

公たちが敵に勝利した後、部下のエピステモンの戦死が判明する。蘇生した彼は、第30章で、地獄巡りの体験を披露する。

「さても私が目にしたのは、アレクサンドロス大王で、古いもんぺを繕って、なんとか喰いつないでいました。

クセルクセス王は「マスタード、いらんかね」と売り声を上げ、

ロムルス王は塩売り、

ヌマ王は釘屋、(略)」（p.322）

国と時代を問わず、実在と架空の別も問わずに羅列された英雄や王たちは、いずれ劣らぬ小商いで生計を立てている。一方、ディオゲネスやヴィヨンなどの貧乏文士は、すっかり羽振りが良くなっている。ラブレーの地獄における王侯貴族をブルジョワジーに変えれば、ラファルグの社会風刺となるのだろう。

『第二の書』をここに挙げたのは偶然ではない。先程の引用の直後に、ラファルグは同書からの長めの引用を嵌め込んでいるのである。引用されているのは『第二の書』の最終章である第34章の末尾近くである。作者は架空の読者に呼びかけ、読者を作者と同じ「愉快的気晴らし」の世界に招致してから、その世界とは対立する敵たちを描写する。「カルト坊主、狂信者、猫かぶり、偽善者、ゴキブリ野郎、生臭坊主、くそ坊主などの同じ穴のムジナたち」（p.336-337）がそれである。この連中を、ラファルグは自作の中に呼び込んでいる。

〈しかし、長く手厳しい復讐に委ねなければならないのは、人間性を墮落させた道徳野郎ども、狂信者、ゴキブリ野郎、偽善者「などの同じ穴のムジナたち、世を欺くためにお面でもかぶったように変装している連中。それで、こういった連中は一般大衆を言いくるめて、自分たちは瞑想と信心に専心し、断食と苦行で煩惱を祓い、蒲柳の質を養うのも必要最小限のみ、と思いきませるのだ。その実、神様もびっくりの飽食ざんまいで、『謹厳居士のふりをして、飲めや歌えの大騒ぎ』というやつ。いまの言葉はデカデカと飾り文字で奴らの赤鼻や太鼓腹に書いてある。奴らが硫黄のにおいで 誤魔化しでもしない限り。〉(p.52)

引用そのものも長いが、引用に入る直前の「狂信者」、「ゴキブリ野郎」、「偽善者」も語順が違うだけで、ラブレーのリストと重なる。地の文にまでラブレーが滲み出しているのである。ラファルグは上記の引用の後、大衆の正当な宴会で「共産主義者や集散主義者」が「酒びんをやり取りし、ハムを廻し、杯を飛び交わす」(p.53) 有り様を描くのだが、「酒びんが行き来し、ハムがちょこまかし、杯が飛び交う」(p.17) というラブレーの表現を使役に変えただけなのは一目瞭然である。

問題の表現は『第一の書 ガルガンチュア』第5章の冒頭に存在する。「酔狂閑談」と題された第5章は、主人公の誕生シーンの前に置かれ、不特定多数、といっても具体的には367014頭分の牛のモツを消化すべく近隣から呼び集められた人々の会話が、主語の別なく羅列されている。台詞の端々から、修道士や法曹関係者など職業が特定できる場合もあるが、全体に名もなき人々の集団性が強調されている。ラファルグはそこに共産主義の理想郷を見出した、と考えれば、酒びんやハムや杯の乱舞するラブレー的宴会が『怠ける権利』に何度も喚起されている点も腑に落ちる。

その後、ラブレーが「同じ穴のムジナたち」と評した仮想敵を、ラファルグは自分の言葉でなぞり直している。ブルジョワ側の知識人と宗教関係者が狙上に上っているのは相変わらずだが、ラブレーの描く普遍的な偽善者像を先に立てたことによって、フランス学士院やマルサス主義や実証主義など、地域と時代の限定された対象が人類のレベルで糾弾されることになる。

敵と味方が明示され、本来なら「怠惰の体制」について論じられるべきところで、ラファルグは読者に肩すかしを食わせる。宴会以外に理想郷を特徴付けるものは、絶えざる「見世物と演劇」のみなのである。現行の立法議会が演目となり、実在の政治家たちがドサ廻りをして「口上」を述べる (p.53)。

ラブレーの語り口を香具師の口上と比したバフチーンならば、『怠ける権利』結末部分のラファルグを「カーニバル的」と評したことだろう¹⁸。前座はロバ耳の選挙民と道化師のブルジョワ候補者による「選挙笑劇」であ

る (p.54)。興業の目玉となる演目は「国家財産の奪取」(p.54)で、擬人化された「資本主義フランス」女史が「歴史の運命」女神に討たれて終わる (p.55)。

中世のジャンルである笑劇や教訓劇に、ラファルグが一種の先祖返りをしたのは、ラブレーの引用に引き摺られた結果かもしれない。そして彼が引用したラブレーは、前期作品に限られることをここで確認しておきたい。「平和に、楽しく、すこやかに暮らし、いつでもたっぷり大ごちそう」(p.337)以上の理想を本書のラファルグは示し得なかったが、この引用は『第二の書 パンタグリユエル』第34章の末尾に描かれた「善きパンタグリユエル主義者」の定義なのである。

ラブレーのパンタグリユエル主義も、前期と後期ではニュアンスが異なる。『第四の書 パンタグリユエル』の序文によれば「有為転変に煩わされない、すこぶるつきの快活さ」(p.523)がそれに当たる。「有為転変」と訳した部分は、直訳すれば「運命のもたらす諸事」であり、運命に翻弄されたラブレーが希求する、俗世を超越した境地である。社会主義運動の渦中にあるラファルグには無縁の境地であるはずだ。

とはいえ、『怠ける権利』の最後に想起されるのはゴルゴダの丘のキリストである。そして、無神論者であるはずのラファルグは、怠惰の女神に「人間の苦しみに慰めを！」(p.56)と祈ることでテキストを閉じる。ラファルグなりのパンタグリユエル主義と思えば、ラファルグとラブレーが合体したラファラブレーがテキストの真の著者かもしれない。そして彼の作品は、社会主義者のお遊びであるはずが、教条的な理念の欠落と遊戯の真剣さにおいて、文学という桃源郷のワインの流れる川の、ひとつの魅力的な島たり得ているのではないか。

註

- 1 ラファルグの生涯については以下の2つの版とマセの著作を参照した。
Paul Lafargue, *Le droit à la paresse*, édition par Maurice Dommanget,

- François Maspero, Paris, 1969 / La Découverte, Paris, 2009, 2010.
 Paul Lafargue, *Paresse et révolution : écrits, 1880-1911*, édition par Gilles Candar et Jean-Numa Ducange, Paris, Jules Tallandier, 2009.
 Jacques Macé, *Paul et Laura Lafargue : Du droit à la paresse au droit de choisir sa mort*, Paris, L'Harmattan, 2001.
- 2 遠藤啓之、「フランス第二共和制における労働権生成」、『共愛学園前橋国際大学論集 第8号』、2008年、p.23-p.43。
 小倉孝誠、『革命と反動の図像学：一八四八年、メディアと風景』、白水社、2014。
 - 3 マルクス、『フランスにおける階級闘争』、中原稔生訳、大月書店（国民文庫24）、1960年、p.74-75。
 - 4 厳密には「労働する権利」(*le droit au travail*)と「労働の権利」(*le droit du travail*)を分けて考えねばならない。前者は働かせてもらう権利であり、後者は権利としての労働条件である。後者を表わすべき「労働の権利」が前者の意味と化す危険性は早くから指摘されていた。例えば『アトリエ』誌の1844年3月号に掲載された匿名の記事がそれである。（「労働する権利と労働の権利」、『資料 フランス初期社会主義——二月革命とその思想——』、河野健二編、平凡社、1979年、p.292-p.293）。同じ立場にラファルグは立つ。
 - 5 本文中のラファルグの引用は、全てモーリス・ドマンジェ版に依拠する。引用ごとにページ数を明示しておいた。『怠ける権利』には既に懇切丁寧な邦訳が存在する。
 ポール・ラファルグ、『怠ける権利』、田淵晉也訳、平凡社ライブラリー、2008年。
 ラブレーとの対比を強調するために、本論では拙訳を用いた。
 - 6 トマス・モア、『ユートピア』、平井正穂訳、岩波文庫、1957年、p.82。
 モアは労働の残り時間を「乱痴気騒ぎやぶらぶらして過ご」すのではなく、「自分の好きな何かほかの有益な知識の習得」に用いるべきだとする（p.83）。
 - 7 アリストテレス『弁論術』、戸塚七郎訳、岩波文庫、1992年、p.97。
 - 8 Anna Ogino, *Les éloges paradoxaux dans Le Tiers et Le Quart livres de Rabelais : enquête sur le comique et le cosmique à la Renaissance*, Tokyo, France Tosho, 1989.
 - 9 François Rabelais, *Œuvres complètes*, édition par Mireille Huchon, Paris, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1994.
 本文中のラブレーの引用はプレイヤード版に拠る。拙訳。
 - 10 ルネサンス期ではペトルルカの『隠遁生活』が知られている。

- Pétrarque, *De vita solitaria / La vie solitaire*, édition bilingue par Christophe Carraud, Grenoble, Jérôme Millon, 1999.
- 11 Jacques Le Goff, *Héros et merveilles du Moyen Âge*, Paris, Seuil, 2005, p.111-p.119.
 - 12 『パニユルジュ航海記』、渡辺一夫訳、要書房、1948年、p.114。
 - 13 Paul Lafargue, *op. cit.*, p.99-p.111.
 - 14 L.-M. Moreau-Christophe, *Du droit à l'oisiveté et de l'organisation du travail servile dans les républiques grecques et romaine*, Paris, Guillaumin, 1849.
 - 15 リュシアン・フェーヴル、『ラブレールの宗教：16世紀における不信仰の問題』、高橋薫訳、法政大学出版局（叢書・ユニベルシタス）、2003年。
 - 16 L. Sainéan, *La langue de Rabelais*, tome 1, Paris, E. de Boccard, 1922, p.409.
 - 17 E.R. クルツイウス、『ヨーロッパ文学とラテン中世』、南大路振一・岸本通夫・中村善也訳、みすず書房、1971年、p.131-135。
 - 18 ミハイール・バフチーン、『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、川端香男里訳、せりか書房、1973年、「III ラブレールの小説における民衆的・祝祭的形式とイメージ」、p.173-241。